

ものづくり de 教育

Vol.26 Jan. 2011

Topics

- 学生の時間割
- 1期生レポート②
- キーワード：リテラシー
- 「相手の立場になる」トレーニング



▲ 新たにできた施設ものづくりコンテナ。

ものづくり教育選修の学生の時間割

月日は流れ、初々しかった一年生も大学生活が日常になってきました。今回は彼らの受講しているものづくり教育選修開講以外の授業について学生たちに聞いてみました。東京学芸大学では、今年度からカリキュラム改正が行われ、今の1年生たちは新カリキュラムの1期生でもあります。新名が各授業について質問をすると、自分の中に吸収した知識をまとめて、ダイジェストで内容を説明してくれました。

東京学芸大学の学生は、共通科目や教育基礎科目などに分類された授業の中から、自分にあった講義や演習を選択していきます。全学で開講されている授業は、同じ学年の他学科の学生と知り合う場になり、様々な交流が生まれます。ものづくり教育選修の学生に、特に印象に残っていたり、今後の糧になったと感じる授業を聞くと、みんな最初に「学芸フロンティア科目」を挙げました。北海道の野外で活動する集中講義です。初めての土地で、他学科の学生も含めたグループ学習は刺激的で、自分たちの力の大きさや小ささを実感したり、友人のありがたさ、自然の厳しさ美しさなど、体全体で学ぶ活動だったようです。先生になるための一番はじめの基礎として学んでいる授業の一部を下記に取り上げます。

教職入門

退職された先生や現役の校長先生が授業の講師として、学校内部の現状や先生の役割について、学校現場で大切なことなどを話してくれる。

教育の理念と歴史

教育の歴史を学習指導要領の変遷から知る授業。世界から見た日本の教育やデュイ等の教育学者、新幹線教育、ゆとり教育等、教育用語の意味を知る。

障害児の発達と教育

特別支援とは何かを学ぶ。歴史が中心で、アメリカと比較したり、世界の中での日本をみて、特別支援の変遷を学んだ。

教育組織論

学習指導要領の作成や教育委員会の体制など、学校教育の制度について学ぶ。学校と教育委員会の関係や、誰が任命するか等。

人権教育

人の権利や差別について学ぶ。世界的な差別、人身差別、部落差別等を知り、年代をおって話を聞く。大人の子どもへの接し方にも人権が関わる。

共通科目（選択制）

「第九を歌おう」「人間形成の哲学」など各学科で、他学科生向けに開設されている授業を自由に選択して受講する。専門以外の分野を基礎から学ぶことができる。



▲ ある学生の1年秋学期の時間割を見せてもらう。秋学期は春と違い空き時間が一気に少なくなり、1日3~4つの授業を受けている。彼女は家庭科開設の授業も受講中。

ものづくり教育選修

1期生レポート

第9回 新井裕史「違う視点から」

昨年の8月に私は自動車の免許証を取得しました。その経験を通じて感じたことを書きたいと思います。

実際に車を運転してみると、自転車の存在が大きな脅威となりました。障害物競争をするかのように車と車の間を縫って走る自転車や、ヘッドホンをつけていて車の接近に気付いてくれない自転車など、危険をはらんだ走行をしている人が多いからです。自転車が危険な運転をしていたとしても万が一ぶつかってしまったら、多くの場合、車の過失のほうが大きくなります。最悪の場合はお互いの人生を台無しにしてしまいます。そのため、車の運転手という視点から自転車に乗っている人を見たとき、それまでは気にも留めなかったような些細なことが目に留まるようになりました。

私は学校に通学するときに自転車を使っています。かつては

当たり前のようにイヤホンで音楽を聴きながら運転したり、ときには朝食のパンを片手に運転したりすることがありました。しかしこういった行為はとても迷惑な行為であると車の運転で気づきました。また、注意して見ているうちに、携帯電話を使用しながら運転することで注意が散漫になってしまうことや、傘をさした片手ハンドルなどが、他人に影響を与える危険になることの重大さを感じ、こういった行為を何故注意されてきたのかを、恥ずかしいことですが、やっと自分で理解することができました。

この一連の出来事で得た経験は、別の場面でも生きてくるはず。例えば、会話をしている話の内容がうまく伝わらないときには、少し立ち止まって相手の立場から考えてみることで、改善ができ、意思疎通がうまくいくと思います。何かをするときに自分の思い込みで任せて行動するのではなく、「常に相手の視点を意識すること」、この心がけが、私のコミュニケーションや生活を良い方向に変えていくと思っています。しっかりと実践して、成長の糧にしていきたいです。

◆このコーナーでは毎月1期生が気になっていることを順番にレポートしていきます。

リテラシー 【名】英：Literacy

意味：①読み書き能力。 ②与えられた材料から必要な情報を引き出し、活用する能力。応用力。

最近の「教育」に関する内容では、②の意味として「PISA 型学力における「リテラシー」」等をよく耳にします。（PISA は OECD による国際的な生徒の学習到達度調査のことです。詳細な内容については、その他の沢山の文献に譲ります。）

このように「リテラシー」がよく取り上げられる理由を私なりに言えば『日本の学校で昔から重視されてきた、知識を豊富に詰め込む「教育」は、それなりに意味のある内容だが、世界では新しい知識や情報、技術がスピーディに変化する中で、それに対応するためには、もっと活用力（リテラシー）を養うことが重要になってきた』となります。左記のような解釈の中で、「リテラシー」を養うことに関して、私が気になるのは「学ぶ態度」の問題です。前出の PISA の調査では「高校生の科学の勉強に対する態度」についても調査しており「勉強に対する「やりがい」や「やる気」」が調査国の中で最下位となっています（PISA2006）。これは「リテラシー」に関する態度面の調査ですが、あなたは、PISA の「リテラシー」に関する調査結果をどう受け止め、新しい「教育」の道をどう切り開きますか？（大谷）

Column::

「相手の立場になる」トレーニング

鉄矢悦朗

今回は鉄矢先生の秋学期の活動を紹介します。身体で動いて感じて理解する、一つの教育のあり方です。（新名）

様々な実践的なものづくり教育／デザイン教育活動を行っている。直近の12月、1月では①静岡県の掛川市での「掛川ひかりのオブジェ展」②「暗黒星雲 2010」展の企画・制作・運営③コンテンポラリーアート・トレーニングなどがある。常にトレーニングの一端を担っている視座に、「相手の気持ちになって」「相手の立場になって」というものがある。

①に関連して実施される親子工作教室をどのようなものにするのかを企画する際にも、参加する親子それぞれの立場になって考えるだけでなく、一緒に運営する市民有志の動きなども考えねばならない。②にあっては、展覧会に来場する人はもちろんだが、実際に展覧会という場をつくりあげるためにかかわる友人（スタッフ）とのコミュニケーションにも「相手の立場になって」ということがなければ上手く進まない。③では、日本語の通じないマティアス先生を相手に対するハードルが、言語に頼らない表現

工夫となった。この工夫は、見せる相手の立場にならなければ、全く伝わらないものになってしまう。

この「相手の立場になる」トレーニングの完了はない。どんなに追いかけても「相手」の立場に同化することはない。これは、どこまで相手に近づけるか探求していくもので、より相手の立場や気持ちに近づくための工夫が無限にあるから、興味が尽きず飽きないものではないだろうか。

「相手の気持ちを今より少し理解する人が増えるだけで、今より紛争もいさかきも少なくなるのではないか。」甘いと言われようと、このトレーニングの目標である。

この3月に厳しい社会状況に飛び出す大学を終える卒業生、学芸大で学んできた教育の視座に自信をもって歩んでほしい。君たちは相手の立場になって考えるスキルがあるのだから。



①掛川ひかりのオブジェ展（主催：好きです！かけがわのまち実行委員会）2010-2011年の回で7回連続かかわりを持つ

ている活動。ここ数回は静岡大学の高橋智子研究室と協力しながら、掛川市民有志の活動を支援している。作品の出品だけでなく、こどもの出品を推進する夏休み親子工作教室（2010/8月）を手伝い、出品（12月）、搬出・まちの片付け手伝い（2011/1月）を行っている。まちの片付けでは、足場などの片付けなど後始末を市民有志とともにいイベントの裏方を体感している。



②「暗黒星雲 2010」展（主催：暗黒星雲プロジェクト実行委員会）暗黒星雲全天アトラスを完成させた、本

学の宇宙物理分野の土橋一仁准教授チームは、天文学の伊能図と称されるなど高い評価を得ているが、意外に知られていない。それをデザインの力で、その偉業をわかりやすく伝えることが主目的、伝えるトレーニングとしての「展覧会づくり」を行うことをサブ目的としたもの。本学、芸術館で開催（2010/12/8-12/23）した。



③コンテンポラリーアートのトレーニング（講義：デザイン研修Bの一部）イェーテボリ大学HDK校の教

員マティアス先生（Mattias Gunnarsson）を迎え、鉄矢との2教員双頭指導による約一週間（12/10-17）の集中演習。「What do you want to change?」の問いに対して、学生はグループで取り組む。自分の持っている能力をフル活用すると同時に、自分、自分たちの暮らしを客観視し、目標とするべき未来のために「change」に必要な探し、言語に頼ることなく見る側に伝えたいことを伝えるトレーニングである。